

Committee Symposium

🎫 Sat. Jul 12, 2025 8:30 AM - 10:00 AM JST | Fri. Jul 11, 2025 11:30 PM - 1:00 AM UTC 🏢 Room3 (Fine Arts Center B1F Theater)

Committee Symposium3(III-CSY3)

座長：須田 憲治（久留米大学 医学部 小児科）

座長：大内 秀雄（国立循環器病研究センター 小児循環器内科）

[III-CSY3-1]

医学研究・論文作成の“相棒”としての生成AI：小児循環器医が知っておくべきヒント

○羽山 陽介（リアルワールドデータ株式会社）

[III-CSY3-2]

生成AI活用入門～何から始めよう？～

○植田 由依^{1,2} (1.千葉大学大学院医学研究院人工知能医学, 2.AMI株式会社)

Committee Symposium

🎫 Sat. Jul 12, 2025 8:30 AM - 10:00 AM JST | Fri. Jul 11, 2025 11:30 PM - 1:00 AM UTC 🏠 Room3 (Fine Arts Center B1F Theater)

Committee Symposium3(III-CSY3)

座長：須田 憲治（久留米大学 医学部 小児科）

座長：大内 秀雄（国立循環器病研究センター 小児循環器内科）

[III-CSY3-1] 医学研究・論文作成の“相棒”としての生成AI：小児循環器医が知っておくべきヒント

○羽山 陽介 (リアルワールドデータ株式会社)

Keywords：生成AI、大規模言語モデル、研究論文

近年急速に発展している大規模言語モデル（LLM）をベースとした生成AIは、医療分野においても応用が進みつつあり、特に医学論文執筆において新たな支援ツールとして注目されています。

本講演では、まず生成AIの基本的な仕組みと特徴について概説します。そのうえで、実際の医学論文作成の場面で、どのように生成AIを活用できるのかを具体例をまじえてお話ししたいと思います。抄録のたたき台作成、文献の要約、英語表現のチェック、図表の説明文の校閲など、生成AIを「相棒」として活用する手法について考えたいと思います。

一方で、生成AIの出力結果には根拠のない記述が含まれる可能性があり、内容の確認、引用文献の正しさ、研究倫理、著者性の担保など、気を付けるべき点も多くあります。小児循環器領域では、疾患の希少性や、成人の病態との違い、患者背景の多様性など、領域特有の特殊性があるため生成AIの使い方にも工夫が必要です。

生成AIを安全に、そして上手に使うためのポイントを整理し、小児循環器領域での研究を論文としてもっと世界へ成果を発信するときに、生成AIをどう活かせるか、今後の可能性と課題について皆さんと共に考える時間になればと思います。

Committee Symposium

🎫 Sat. Jul 12, 2025 8:30 AM - 10:00 AM JST | Fri. Jul 11, 2025 11:30 PM - 1:00 AM UTC 🏠 Room3 (Fine Arts Center B1F Theater)

Committee Symposium3(III-CSY3)

座長：須田 憲治（久留米大学 医学部 小児科）

座長：大内 秀雄（国立循環器病研究センター 小児循環器内科）

[III-CSY3-2] 生成AI活用入門～何から始めよう？～

○植田 由依^{1,2} (1.千葉大学大学院医学研究院人工知能医学, 2.AMI株式会社)

Keywords：生成AI、文献検索、大規模言語モデル

進化していく生成AIを使えば、文献検索、論文下書き作成、英文翻訳などなんでもできそうな感覚に陥るが、普段から使い慣れていないと、具体的な使い方やその信頼性の判断が難しい現状がある。どの分野においても言えることとして、使い始めとしてのオススメの方法は、「時間をかければ自分にもできることや既に習得している範囲の作業をサポートしてもらう」ということである。例えば、英語論文をさらさらと読めるようになることは重要なスキルであるが、それを優先するあまり結局論文を読まないよりは、生成AIが日本語要約をしてくれたものを日常的に読み、その中で気になったものを英語で全文読む方がメリットは大きいと考える。単純な要約だけでなく、論文作成の際の参考文献ではタイトルで検索した後、求める趣旨の内容が書かれているか、どのように書かれているかを生成AIに問うことで効率化が図れる（例：Googleが提供するNotebookLM）。とは言え、ここ2年での生成AIの進化はめざましく、以前には見られたような「使う人が使えば精度が良い」「プロンプト（AIに与える指示や質問）を工夫すればいい結果が得られる」という性質も薄れていっているので、抄録提出から4カ月先の学会当日はどこまで手軽に生成AIを論文作成の過程に組み込めるようになっていくかは予測できない。なるべく最新の情報を届けられるように努める。尚、この抄録は全文を作成した後、ChatGPT(o3-mini-high)に批判的な推敲を指示し、一部の言い回しを変更した。